

5-1 足立区産のつまもの(めもの・芽物)。

退職する年であったが、足立区で区内の農産物の、研究会が開催されたときに、区内産のめものなどの展示があった。研究会の内容は区内の特産を特に、認識してもらおうという、意味があったかと思う。その時の写真である。収穫は鋏で刈り取るという話で、あとで私がそのようすを図にしたのである。確かそのとき新聞に『ピンセット農業』と紹介されたのを記憶している。事ほど左様に細かな農業である。

写真-24

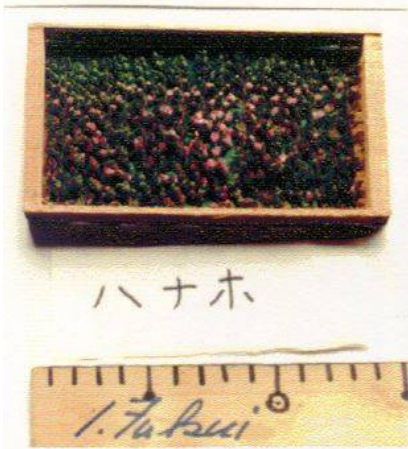


写真 25



写真-26



図-8 アカメの収穫

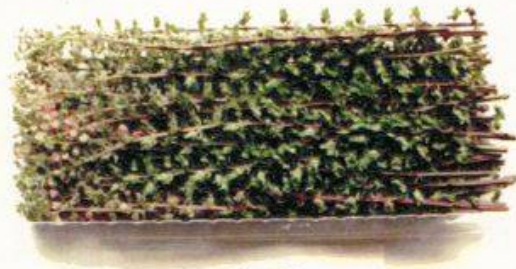


写真-27



アサツキ

写真 28



タバコ

写真-29



タテ

写真 30



サンリョウ

## 5-2 つまもの 歴史と現在

江戸が武士の府から、元禄の生活文化爛熟期（1700）と、次第に食生活も向上して、贅沢になり文化・文政の所謂「化政期」（1804-29）には、料理屋も江戸に多くなり、その中には今に続く店もあるという外食文化も普及してきて、幕府の禁令には『野菜ものなど季節に至らざる内、（略）きゅうり、なす、いんげん、ささげの類（略）年中時候外れニ売出し候段奢侈を導く基にて（略）吟味の上、急度咎に申し付くべく候。』と度々、禁令を公布しているが、何時の間にやらなし崩しに、元の有り様に成ったのは、人々の要求が強く、元来質実剛健の武士階級も、奢侈に流れ町人の富豪も増えたのでどうしようもなくなったと見える。つまもの産地は江戸の近郊で、その上船運の便の良く、生産地から市場まで、或いは直接料理屋の勝手口に船を付けられる地帯に限るので、北山、東山の船運の良いデルタ地帯に発達して、江戸から明治になっても、三河島村、砂村などが主産地として知られていた。野菜に限らず、敷地を要する生産事業は住宅地が、それらの地帯を浸食すると、次第に後退して生産地が移動しているのは、江戸に限らず東京になっても現象は同じである。

江戸のつまものは東京となって住宅地が膨張していくと 次第に後退して、殊に関東大震災による住宅地の近郊地帯への進出は、砂村や三河島村から消えて、隣接地に移動して行った。幕府の禁令の野菜の品目には、現在のつまものらしいの見当たらないのでつまもの歴史については、不明の点が多い、現在の足立区の産地も、荒川対岸の三河島村から、どのような形で産地が移動したか不明だが、地元の聞き取りによると、どうもそうらしいのである。技術か、生産者の移動かこれも不明である。

明治政府の『東京府志料』にも、全く触れていない。書き上げるほどの産額ではなかったのか？、故意に書き上げしなかったのか？、ともかく記録がない。しかし、フキ（款冬、蒨）やシソ（しそ、紫蘇）、キクの花（菊の花）、キュウリ（胡瓜）などの書き上げがあるので、その幼植物をつまものとして、出荷されたのではないかと、私は推定している。南葛飾郡となり、郡農会が置かれて、半官半民の指導機関が昭和まで続いたが、それらの詳細な記録にも、つまものについては全く見当たらないので、現在と同じく不可侵農業であったのかどうか？、不思議と言ってよい。戦後野菜園芸学がかなり詳細に発達したのに、つまものについては全く触れていないのは、前にも述べているが不思議な現象である。最近の食生店の向上は、スーパーで、つまものシソのオオバ（紫蘇の大葉）、ホソネギ（細葱）などが売られていて、つまもの普及の一面を見せている。